
恋姫無双～龍の如く～

bigboos

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋姫無双～龍の如く～

【Zコード】

Z5641Y

【作者名】

b19900s

【あらすじ】

ある日暴走車に引かれて死んでしまった鬼龍和人、目の前に爺さんが立つていて二つの選択を言われた、ここに残るか・異世界に行つてやり直すかと言われた。この話はぬらりひょんの孫×デビルメイクライ×恋姫無双・・などまあ、チートを使っています
初めて書くので恋姫無双などに關して「知ったかぶつてんじゃねーよ」とか思う人がいると思いますが許して下さい

第一幕 僕は・・（前書き）

どうもひらばーすです初めてまして、いや～書くのは初めてなので応援よろしくお願いします

第一幕 僕は・・

あの日、こつもじつに過りていた僕はその日

聖フランチスカ学院園から家に帰るとしていたところに

突然、暴走車が突っ込んで来てかわせず死んでしまった・・・

う・・・うは

「よひやく田を覚ましたか・・・まつたく」

あんたは・・

「ワシか?ワシはただの爺やんじやよ」

そつか・・で爺さんじやなんだ

「じいが?じいがあのせじや」

え・・・えええええええええ?

うそだろ?なんで俺死んだんだよ?

「お主暴走車に引かれてしんだじやろ・・・」

うーんあんまり記憶にない

「本当にうお主はあやしむ死ぬはずはなかつた、じゃがお主が死んだ時

本来なら輪廻の輪に戻るはずだつたんじやが、なぜか輪廻の輪から外れてしまつたんじや（笑）」

なんでアンタ笑つてんだよ？（怒）

「まあそれはとにかく、この後お主はどうしたいんじや？このままでここにいるか？」

それとも、異世界に行つてやり直すか？お主の好きな方を選ぶんじや。」

え・・・それはここに残るのはさすがに嫌だけじ、向こうの異世界に行つたら赤ん坊からやり直しなのか？ていうか異世界つてどんな世界なんだ？それによつて決まるけど・・・

「ん？ その世界は・・・ま行つてからのお楽しみじや」

うーん、どうしようつ・・・

俺なりに考へたすべ、結論ここにいるのは暇だと思つたのド・・・

爺さん、俺異世界に行く

「む、やつかでせうやく・・・」

ちゅつとまつた――？

「つお？ なんじやこきなり、大声出しあつて？」

赤ん坊からつて言つのはちよつと氣にへわねえな、せめて20才にしてくれ頼む？

あと何個か願いを叶えて欲しんだ

「わがままな奴じゃな・・いいじゃろ、で他になにを叶えてほしん
じや？」

第一幕 僕は・・（後書き）

途中で終わつてしましました、スマスマセン次回は主人公がいろいろ
いろいろ
チートのような事を言います
アドバイス宜しくお願いします

第一幕 ルーファーから

まず一つ目は「ビルメイクリーズのページ」と、服装と髪型意外は全て同じで、二つ目は外見だけどぬらりひょんの孫に出てくれるので、まあなんでもいいです

四つ目は年齢は二十歳にしてくれ、赤ん坊の頃からって言つのはあまりにも嫌だから。五つ目は、女性に多少モテル

ぐらいにしてくれ、最後はどんな傷でも治せる薬をくれ

「つーむ、まあよこじやろ 一つ目と四つ目は叶えてやります。二つ目じゃが外見は

なんでも良いと言つたが、本当に何でもいいんじやな？」

ああ・・いいけど

「つむ、分かつたあとで後悔するんじやないぞ、よいな？ 五つ目は十人中七人が振りかえるぐらいでよかひつ」

まあ・・いいけど

「最後の願いじゃが、この薬を持って行くがよいどんな傷でも治せるものじゃ。

じゃが、悪しき者には使つでないぞ、いいな？」

分かつた

「それでは早速異世界に送るからの、元氣でのう・・

「おつと忘れる事じやつたお主なはなんと申す

俺の名前は鬼龍和人、向こうの世界では結構優しかったんだぜ？」

「ふむ、鬼龍和人か・・良い名じや異世界でも優しい心を持つのじやぞ。

そして、平和な世の中にするんじや」

そして俺は光に包まれて目の前が真っ黒になった

う・・うーんーいは・・
目を覚ますと川に近くにいた、「ここが三国の世界か・・
ん? 何だ手紙か『鬼龍よお主がこの紙を見ているとゆうことは無事
着いたようじやな

お主がいる世界は三国の世界じやが、ただの三国世界ではない、恋
姫無双の世界じやこの世界は

・・・・・とゆう感じじや、あと外見じやがなんでも良いと言つた
ので淡島にしといたからのじやあの『

手紙に書かれたことを理解し、立ちあがつた・・そしてこれからどう
しよう。

第一幕 もうじきこれから（後書き）

いつも、寒いです。今回、これからのように終わってしまってス
イマセン

次回、鬼龍はとりあえず人に会つために歩いていると、山賊が一人
の女子を囲んでいた。鬼龍は助けようとする・・

第三幕 黒髪の女～前編～

俺はとりあえず人に会うために道を歩いていた
「ん？ あれは・・・」

よく見ると道の端つゝ二人の男とその前に一人の少女がおびえていた

『へへへ、金目の者を渡しなへへへ』

『そりだぜ速く渡しな』

『は、早くわ、渡すんだな』

なんだあいつら、人の金を奪うのが、と言つ事は山賊か・・
とりあえず助けるか

「おーいそこの人」

『ああ？ なんだガキ』

ガキとは失礼な、二十歳だぞ

「その娘おびえてんだろ、離してしてやれよ」

『なんだと、部外者はどうか行けよ』

そう言いながら山賊の一人が、剣を抜いて俺にむけた

「おー、もう一度言つて、その娘を離してやれ」

俺はそう言いながら閻魔刀を鞘に入れたまま抜いた

『お・・なんだやるつてのか後悔すんじゃねえぞ?』

ほかの一人も剣を抜いて構えた

「おい、お前らここまで後悔すんなよ?」

『し、死ぬんだな』

デブが怖そうに突っ込んでくる

はあ～めんどくせ、俺はそう思いながら閻魔刀でデブのみぞおちを
叩いた

『ぐふう?』

『あ、兄貴? デブがやられた?』

『な、なんだと・・ デブがやられた』

おいおい、味方のお前らまでデブって言つなよ

『つ・・? おい次お前がいけ?』

『いやつすよ～兄貴が行けばいいじゃないですか?』

なんか、一人でもめあつているな、今のうちこ・・

『ん?』

『なんだ?』

地面を蹴つて、刹那の如く目にも止まらぬ速さで
一人のみぞおちに、閻魔刀を入れた

『ぐふう？』

『あべし？』

そのまま一人は氣絶した、「ふうへあ・・・大丈夫か？」
少女の所に駆け寄り声をかけると、『あ・・・ありがとう・・・
おびえた様子でこっちを見ている。山賊じやないですよ～～

「ああ心配して、俺は山賊じやない」

『ほ・・本當？』

「ああ、嘘はつかねえわ」

『・・・・・』

ああ～警戒してゐねえ、まあいいかおつとそれよ

「あのや、いじの近くに村とかないか？」

『あるよ、いじをまつすぐ行つたところ』

「そつか、ありがとう・・・あ君はいじに行くの？なんなら送る
けど・・』

俺がそいつと、『私は、この先にある村に住んでる・・・
ん？じやあ俺と向かう所か

「じゃその村まで一緒に行うか

『え、でも・・』

「いじつて、また山賊が出たら危ないだろ？』

『うん・・』

お、村が見えたぞ。

あれから数分かかってようやく村の少し手前まで来た。よし、あと少しで・・・と思つた瞬間、横からいきなり一人の女が俺に向かつて槍のようなものを刺してきた。

「うお？あぶねえ？」

少女を抱えて、少し後ろに下がる

「誰だ？」

闇魔刀を構えて俺がそう言つと、黒くて長い髪の女が、

「わが名は関羽？字は雲長？その娘を離せ山賊め？」

と体にまとつていた布を撮り名のつた

こいつが、関羽か・・・男だと思つてたけど、そもそも言えれば爺さんの手紙に

恋姫無双とか書いてあつたけど、つて言つた俺は山賊じやねえ——

第三幕 黒髪の女～前編～（後書き）

いつも、お読みありがとうございます。今回やつと武将がでてきました

この後も楽しくしていくのでアロシク

次回は主人公の設定を書こうとおもいます

コメント、感想お願いします

遅くなりながら、オリ主設定

主人公

鬼龍和人（二十歳）

身長：178cm

体重：75kg

体格：無駄のない体。（おもに筋肉）

容姿：心は優しい。外見はぬら孫の淡島

意外に平和主義

聖フランチエスコ学園に通っていた普通の高校生
普段は、テニスなど体を動かす事をしている
怒らせるとたとえ妖怪など、一瞬にして震えあがる
外見が淡島なので夜になると、女の姿になる。
昼は男の姿

三国志はときどきにしか、見てないのであまり詳しくない
北郷一刀とは友人

武器
闇魔刀

デビル3に出てくるバージル愛用の闇属性の日本刀。「人と魔を分
かつ」とも、「闇を切り裂き食らい尽くす」とも言われている刀、
鬼龍が使うとバージルを超える力を出す

ベオウルフ

攻撃力があり、攻撃速度も速い。

鬼龍の場合これを使うと拳が痛い

フォースエッジ

こちらは、デビル1に出てくる。ダンテが装備しており、アミュレットがそろうと魔剣スパーダになる

鬼龍はこれを危ないときや助けるときにつかう

幻影剣

魔力により出来た剣。

自分の周りや相手の周りに、設置できる。その場から直接相手に放つことができる

最大でも五人まで同時に攻撃出来る

ダークスレイヤー

敵の前方・上方・下方（地上だと後方）へ瞬時に移動し一気に間合いを詰める事ができる。移動・回避にも役立つ

鬼神の“鬼憑”完全なる父性 “伊弉諾”^{イザナギ}

鬼龍が男の姿の状態で闇魔刀を装備している時に発動できる
どんな相手でも一刀両断できる、そのためには「畏」を溜めて一気に放出する

この技はねら孫の淡島ので、魅を放ち鬼の如く恐怖に落とし入れる

天女の“鬼憑”完全なる母性 “伊弉冉”^{イザナミ}

鬼龍が女の姿の状態で発動できる、武器は必要なく混乱している味方に対しても使用する
使用すると少し疲れる

戦乙女演武

乙女の“”とく艶やかな舞で翻弄する。

これも、女の姿でしかできない。

魔人化

武器はどれでもよい、男の姿でしかできない

覚醒・魔剣士スパーク

鬼龍が怒りや悲しみが頂点に達した時だけに覚醒する

武器は魔剣スパーク、姿は攻撃をする時だけスパークの姿になる。常に、周りには幻影剣が配置しており、攻撃してくる敵には容赦せず、降伏する敵にはみぞおちを入れる。

背後にはイザナギの姿が見える。（なぜか・・）

この状態の時はどんな攻撃も全く効かない。（たとえ、マグマでも、レーザーでも）

フォースの力

あらゆるもの、手を触れずに動かせたりできる

遅くなりながら、オリ主設定（後書き）

オリ主の設定は話が進むたびにたまに変わります
まあ・・あまり変わらないとおもいますが。
鬼龍は、もう最強になつてると思います

次回鬼龍はいきなり出てきた関羽と戦う事に・・・

第五幕 黒髪の女(後編)

愛紗

「愛紗、村はまだなのか、鈴々は疲れたのだ」

私も疲れたやつたよ。

「うむ、私も少し疲れてしまつた」

二人ともみーともなし おまに囁んで・・

「朱里、雛里大丈夫か？」

はし 和はナヌキです

一人は大丈夫のよつだな

それから少しして、道ばたに三人の男が倒れていた。

「桃香様？人か倒れています？」

惠一之圖

「大丈夫か？しつかりしろ？」

『新編 五國史記』

何を言つてゐるのだこの男たちは

黒川に仕方のない事

『や、山賊が、おらの娘をさらつたんだ？』
「何だと？ それで山賊はどうせ行つたんだ？」

星がきくと、『た、確かに向こうの村の方に行つた気がする・・・

「村か、分かつたあなたの娘を助け出そつ」

『本當か？ありがとう』

「おい、愛紗その山賊の特徴をきいとかないでいいのか？」星が言つ

「あ・・そうだつた、山賊はどんな姿だ？」

『腰に黒い刀をしていて、あと・・すまん忘れてしました

黒い刀か・・・この国の者じゃないそつだな

「よし、星、鈴々助けにいくぞ？」

『鈴々はつかれたのだ』

「私も疲れてしまつた、少し休ませてくれ」

「まったく、じゃ二人は桃香様を守りながら後からきてくれ」

そつ言い残して私は一人、腰に黒い刀をさしている山賊を探しだした

はあ、はあ、どこにいる、あれからずいぶんと絶つが黒い刀を持つ
ている

山賊はどこにもいない。

「向こうの方を探してみるか・・・

向こうに行く途中話し声が聞こえた。

「ん？ あそこにいるのは・・・」

一人の小さな少女と腰に黒い刀をさしている男がいた

「あいつか

そのまま山賊に向かつて青龍円月刀を向けた。

「うお？ あぶねえ？」

相手は少女を抱えて後ろに下がった。

「誰だ？」

男が見たこともない剣を向けて行つた

「わが名は関羽字は雲長？その娘を離せ、山賊め？」

鬼龍

なんだこの女、いきなり人に槍のようなものを突き付けて、礼儀をしらねえのか

「おい、いきなり襲つてきやがつて、お前も山賊か？」

「なにを言つたか、お前こそ山賊だろう？」

「・・・？、なに言つてんだよ山賊なわけねえだろ」

そう俺が言つと、「つむさい、山賊め？覚悟ー」

ブン？ ガキンン？

俺はすかさずフォースエッジに武器を変え関羽の攻撃を防ぐ

「くう・・・・？何すんだよ？話をきけよ。」

「問答無用？はああああ？」

く・・・・このままじゃ、ん？そつだ・・

何だこの男、ただの山賊だと思っていたが違う、この男はまるで・・

・

よし、いまだ。

ブン？ 残像を残しながら相手の目の前に移動する

「え・・・」

そのまま、相手の足をはらつた

「 きや ？」

そのまま地面に倒れこみフォースエッジ突き刺す。

「これで「まつてください?」なんだ次は」

そこには五人の女が後ろに立っていた

なんだこいつら・・・

第五幕 黒髪の女～後編～（後書き）

いつも、やっぱり戦闘のところは書くのが難しいです。
でもまあがんばります

次回、鬼龍は誤解をやっと聞き入れてもらい、五人の女の子達と村に
目指す、しかしそこには鬼龍が倒した山賊三人組が待っていた。

第六幕　願い（前書き）

今気がついたけど第一幕以外は全部（改）になつていた（笑）
その理由は、すべて途中で作成を終えたのでまた途中から、するこ
とに
なつたんです

第六幕　願い

鬼龍

「で、その男三人達に山賊が娘をさらつたって聞いて俺を襲つたのか

「申し訳ない」

頭を下げる関羽

「むやみに人の言つ事をきくな」

「「「「本当に申し訳ない（『やれこません？』（のだ・・・）』」

「他の五人も一緒に謝つていた

「あ、いやそこまでしなくてもいいから、頭上げて」

「え、あはい」

「うむ」

「お兄ちゃんは優しいのだ」

「優しい方ですね」

「本当だね」

「や、優しい人でしゅ、歯もじやつた・・・」

そこまで言わなくていい・・・と、そうだけの子をむりに連れて行かないと

「じゃあ、この子を村におくるから、なんならあんた達も一緒に来るか？」

「え、どうして？」

「いや別に、あんたがどうに向かつてんだ？」

「あ、この先にある村に行こうとしていたんです」

「村か、じゃあ俺が行くとか・・・

「じゃあ行くか？一緒に」

「え・・・でも」

何か困りごとでもあつたか

「あ、いやいいんだ。無理に行かなくても」

「あの・・・？」

「何のようだ？」

「付いて言つてもいいですか？」

「も、桃香様？」

「だつて、優しそうな人なんだもん」

「ですが・・・？」

「そうだぞ、案外平和主義なんだぞ、俺は」

「ああ、いいけどその前に一つ質問していいか？」

「はい、何ですか？」

前から聞こうと思ってたけど、たしか別の名前でよんでもたな

「あのや、なんで関羽のことを、愛紗つて呼んでたんだ？」

ブン？「今の言葉を取り消せ？」

また、関羽が青龍円月刀を俺に向けて振つてきた

「あぶねえ？なにすんだよ？俺はただ・・・」

「うるさい？黙れ？」

ブン？ブン？

「愛紗ちゃんダメだよ？ちゃんと質問に答えない」と

「ですが、こいつは私の真名をよんだのですぞ？」

「真名？なんだそれ？」

真名と言つた瞬間関羽が睨んできた。本当に知らないんだつて？

「私が説明しますね

“真名”は、本人が心を許した証として呼ぶことを許した名前であり、本人の許可無く“真名”で呼びかけることは、問答無用で斬られても文句は言えないほどの失礼に当たるのです」なるほど、それで関羽が怒つてたのか。

「あ、そう言えば自己紹介がまだでしたね、私は劉備、字は玄徳、真名は桃香だよ よろしくね」

「桃香様?? なぜ真名を教えるのですか??」

「たしかに、別に教えないでもいいのに・・・」

「だつて教えてもいいと思つたんだもん」

「だからといつて・・・」

「皆はいいよね」

「私は・・・では一つお願ひがある」

関羽の後ろにいた薄青色のした髪の女が言つてきた、なんだねがいつて?

「私と一度手合させを願いたい、もしそなたが勝つたら真名を教えよ」

「え、だめだよそんなことしたら」

劉備が言つと、「鈴々もそれがいいのだ?」

「私もそれがいい、覚悟しろよ・・・」

関羽と鈴々とか名乗る奴に、薄青い髪をした女が言つてきた

「ああ、いいぜかかつてこいよ、三人まとめて相手してやる」

「では、こぞ?」

関羽の掛け声と同時に三人が走つてきた
後悔すんなよ?

第六幕　願い（後書き）

どうも、せりと出来ました。
いやあ～長かったです

第七幕 メモリ・

「ヤアアアアアアア？」「ブン？サツ？」

「おっ、鈴々とかいう奴なかなかやるな、

「だが、まだまだ？」

ベオウルフの籠手を装備して、鈴々にストレートを放つた。

「うわあああ？」そのまま後ろに倒れこんだとたん、関羽が突っ込んできた

「ハアアアア？せい？」

ギイン？「痛つて？」ベオウルフで関羽の攻撃を防いだけど、少し痛い。

「！」の？「関羽にも、ストレートを放つた。

「さやあ？」関羽はそのまま、後ろに倒れた。

「おいおい、まだ出来るだ「さあ？」？」

「そ？よけきれない？・・・・よし

「せいやあああ？」スカ、え・・・

「！」ひだり。

危なかつた、もう一人いるのを忘れてた、そう思いながら薄青色の髪を持つ

相手の後ろに回り込んで、閻魔刀を突き付けた。

「くつ・・・?私の負けだ・・・」

ふう、やつと終わつた、さすがに疲れたな。

「三人とも大丈夫？」

劉備が三人達に近寄り声をかける。

「あの、大丈夫ですか」

横に二人のかわいらしい少女が近寄つてきて、こつちを見ながら聞いてきた。

「え、ああ大丈夫だ、ありがとな」

二人の頭をなでてやつた

「 / / / / い、 いえ / / / / 」

なぜか一人の顔が赤くなつた、熱でもあんのか？

「おい、約束」

「なんだ、殴る気か？」
そう言うと薄青色の髪の女が立ち上がり、こちらに向かって歩いてくる。

「私の名は超雲、字は子龍、真名は星だ」

超雲か、たしか槍の使い手だった気がする、真名は星か。

次に一人の少女がこちらを見て

「私の名前は諸葛亮、字は孔明です、真名は朱里です」
「はわわわ、私は鳳統、字は士元、真名は離里でしゅ、はわわわ噛
んじやつた」

小さい帽子の方が、諸葛亮で真名が朱里か、で青い帽子の方が鳳統
で真名が離里か。

この二人は知つてゐるぞ、天才軍師だつたな（確か・・）

「鈴々は張飛、字は翼徳なのだ、真名は鈴々なのだ」

張飛か、確か酒が大の好きつて書いてたな真名は鈴々か、自分で言
つてたけど。

そして、最後は関羽・・・だと思つたが氣絶しているらしい、そん
なに力いれたつけ？

「おい、大丈夫か？」

「うへん

反応がない、ただの屍のようだ、とそんなことより

「とりあえず関羽を村に運ぼう、そまだあんた達のことを何て呼べ

ばいいんだ?」

劉備から「真名は愛紗ちゃん以外はみんな、あなたに教えたから真名でよんديいこよ」

「いいのか?」

「つむ、いいぞ」超雲がそつそつ

「鈴々もいのだ」

「はい、いいですよ」

「はい、いいでしょはわわ、また噛んじやつた」

「みんながそつそつない、あ俺の名前は・・・ま関羽が田を覚めてからおしえるよ」

今教えたら混乱するからな、夜も近いし姿の事もあるからな。

「じや、星運ぶの手伝ってくれ、もうすぐ夜になるからな」

「つむ、わかつた

「つして俺は、桃香、鈴々、星、関羽（真名はなんか分からん）、朱里、離里達の真名をさずかつた。

れて、じじに来た事情の事を村で話すとするが、ふああああ眠い。

第七幕 よりやく・・（後書き）

どうも、前の文章が読みにくいと思つたひとがいるかも知れません
スマセン、今回は読みやすくなつてるとおもいます（たぶん）
次回鬼龍は村に着き、宿で事情をはなした、そして・・・

第八幕 真名（前編）

「村についたのだ」

あれから星に関羽を持つてもらつて、村に着いた。

「ふう、やつと着きましたね」

「もう、足がガクガクだよ」

「大丈夫か？」星

「ええ、大丈夫です、その子はどうするのです？」

あ、そうだったこの子の家はどうだらつ

「自分の家は分かる？」

「う、うん分かるよ」

「じゃあ、教えてくれるか？」

そして、少女の家に着いた

「ありがとうございます、ほらちやんとお礼を言つて」

「あ、ありがとうございます」

「いや、いいんだ次から氣をつけろよ」

よし、これでひとまずはいい、「チヨンチヨン」誰かが背中を突ついてきた

誰だ？

「あの～一つ聞いてもいいですか？」そこには朱里と離里がいた。

「ん？ どうした？」聞くと、

「今日、どこで休むんですか？」

ん？休む・・・」で・・・考えた、そして言った。

「分からん（キツパリ）」

二人共両をキヨーンとしている、いやホントどうじょ～？

「あの～、」

「ん？はい」

「もしよければ、私たちの家で良ければ、休まれますか？」

ほ、ホントか？これはラッキー？

「いいんですか」

桃香が嬉しそうに聞いている。

「ええ、いいですよ」

「ありがとうござこます、あと良ければ」の人も良いですか？」

星が闘羽を指差して言つ、「ええ、いいですよ」

「「「「「じゃあ失礼します（のだ～）」」」」」」

おおお～つまそくな飯だ、「パク」

鈴々が先につまみ食いをした、何をする？（ムスカのよう）

「鈴々ちゃん、つまみ食いはいけませんよ」朱里が鈴々を叱つた
「だつて、鈴々はお腹がすいたのだ～？まだ食べちゃいけないのか

۲۷۷

「もう少し我慢しろ、私だって我慢してるんだ」と星が言う
「私もお腹がペペなんですよ」桃香先鈴々と同じ様な事を言う

たしかに俺も腹がへつたな

「おまたせしました、えんりょうなく食べて下せこ」

「あ、どうせじゃ」「…………いただされ〜す?」「…………つて野?」

さすがに俺と星はすぐには食べなかつた、だつてまだ名前聞いてね
えもん

「あーーお前は・・・」

あ、向こうから聞いて来てくれたありがたい。

「私は超雲、字は子龍、真名は星だ、よろしく」

「あ、私は劉備、字は玄徳、真名は桃香だよ」

「はわわわ、私は鳳統、字は士元です、真名は離里です」

今日は噛まなかつたな。

「鈴々は、張飛、字は翼徳なのだ、真名は鈴々なのだ、」

四

「星さん、元桃香さん、鈴々川さん、離里ちゃん、朱里ちゃんです

二〇二二年二月二日

「元氣の発達」

「で、あなたのお名前は？」

「あ、俺は・・・後で皆が集まつた時に聞こます

それから数分後、奥の部屋から関羽が顔を出した、

「なにやら騒がしいですね」

「あ、愛紗ちゃんが起きた～」

もう腹いっぱいだ、ゲップ

「いつぱい食べたのだ～」

「つむ、これ以上は食べれないな

「おいしかったです」

「おいしかったですね」

「お、関羽やつと起きたか」

「き、貴様、なにをしている？」

「いや、何つて飯を食つてただけだけど、なあ桃香

「はい 愛紗ちゃんむどうぞ、おいしくすよ～」

「え、いや私はあまりお腹は・・・」

ギュルルルルル～～～

「／＼＼＼＼＼」、これは違います？そ、その・＼＼＼＼＼

「えんじょしぬくてもいいんですよ、さぢ／＼＼＼＼＼

「じゃあ、お言葉に甘えて、いただきまーす」

パクパク、もぐもぐ、凄い勢いで食べてる

「お名前は？」

「わ、私は関羽、字は雲長、真名は愛紗です」

「愛紗さんね私は南葉、この子は凜と言います、娘の事は有難うございました」

「い、いえ」

「ところであなたお名前・・」

「あ、皆いるな、じゃあ俺は鬼龍、字は和人、真名はない、あと俺は異世界から来たんだ」

この後、事情を説明した。

第八幕 真名（前編）（後書き）

書いてたら文が多くなったので、前半と後半にわけます

第九幕 真名（後編）

「…………」

混乱している、まあ確かに異世界から来たって言つのもつかへてしまいしない

「異世界？ それってどんなところなんですか？」

朱里が聞いてきた。

「うーん、説明するのがむずかしいから手短に言つと……」

そこから手短に事情を話した。

「と言うわけ、わかった？」

「なんとなくはわかつたけど……」

「それが本当ならすごいことなのだ？」

「たしかに、すごいことだね～」

「うむ、確かに手合わせした時も珍しい武器を持っていたし……」

星が俺の持っている武器をジロジロ見てきた

「たしかに見た事ない服を着ていますしね
「確かに」

朱里と離里は服が気になるらしい

「あと、真名が無いと血のせびつ血の事だ」

関羽が訪ねてきた

「ああ、説明する前に関羽、あなたの名前愛紗って呼んでもいいか？」

「え、ああ約束だかな」

よし、じゃあ説明しよう

「真名は親からもいりうんだる？」

「ええ」桃香が答える

「俺がいた所は、真名は存在しなかったんだ、だから真名はないんだよ」

本当なんだよ~

「あと、もうひとつ見せたいものがあるんだけど」

「なんだ？」

「なんですか？」

「なんなんだ〜？」

外はもう夜になっていた、月がきれいだ。

「で、なにをみせるんだ」星が聞いてきた。

「もうそろそろだと思つんだけど・・・」

「「「「「？」？」？」」

そして、体が光に包まれた。

「 「 「 「 「 ？」 」「 」「 」「 」「 」

「 か、 体がひかつて るよ ？」

「 ど、 どう した のだ ？」

「 なん だ・・・・・？」

「 こわい です う？」

「 はわわわわ」

次の瞬間、光が消えて男だった俺が姿が女になっていた、 そうこれが妖怪・淡島の特徴

淡島は昼になると男、夜になると女になる妖怪。

「 き、 鬼龍さん・・・・・？」

「 どうして、 女になつちやつた のだ ？」

「 信じられん・・・・・」

まあ、無理もない、姿の事を言つてないからな

「 実は俺、 昼は男、 夜は女になる妖怪なんだ、 ただし全部が妖怪じゃない

何て言つうか半妖半人なのかな、 この場合」

「 半妖半人？ 何ですかそれ？」 朱里が不思議そうに聞いてくる

「 え、 ああそれは・・・・・」 俺が答へよつとすると

「 半妖半人つて い うのは、 半分が妖怪で半分が人間という事だ」 星が話してくれた
なん で知つて い んだ？

「ああ～なるほど」ポンと手をたたいた。

「じゃあ、お風呂はどこですか？」桃香が聞いてきた

「え、うんー応俺は男だつたからな、男湯だろ」

「胸がおつきいのだ？」

おこない、そこに田をやるか？普通、でもねうつひょん、出でくる淡島は確かに胸が、おつとこれ以上言えねえわ。

「――――」、「こり? 鈴々、そんな事をきくな?」―― 愛紗が顔を赤らめながら鈴々を叱った

「愛紗よりも、大きいのだ？」

「余計な御世話だ？」愛紗が大声で怒鳴った、ちょっとは声の音量下げるよ、夜だぞ今。

「そもそも何の妖怪なんですか?」離里が聞いてきた。

「淡島つていう妖怪なんだけど」

「じゃあ、真名は淡島でいいんじゃないのか？」星が語ってきた
「そうだな、それでいつか、桃香達もそれでいいか？」

「いいんじゃないかな
「それでいいと思うぞ」

「そ、それでいいのだ～」なぜ泣きながら言つて居る鈴々よ
「私もそれがいいと思います」
「え、はわわわ、いいと思います」

皆が嬉しそうに言つた、鈴々以外は。

「じゃあ今日から俺の真名は淡島だな、よろしくへ

「「「「「よろしく頼む（なのだ～）（おねがいします）」「」「」「」

この後俺は風呂に入り、早く寝た・・・

第九幕 真名～後編～（後書き）

どうも、今回は主人公の真名を決める話しだけいかがでしたでしょうか

途中、少し色気のようなものを入れましたが、まあ、どうでもいいですねはい。

第十幕 旅立ち・・のはずが

「うへへへへん、はあ～」

いい天氣だ、何かいい事がありそうだな

「淡島さん、おはようございます」

「ああ、おはよう」

そこには朱里がいた。

「昨日は大変でしたね」

「まあな、でもあれで全部分かつたからいいんじゃないのか？」

「そうですね」

朱里が小さく笑う。

「む、何だもう起きてたのか」

星が少し眠たそうにしながら、起きてきた。

「おへ、おはよう」

「せうだ、いつ聞こいつか思つてたんだが

「ん？」

「これからお前の事をじり呼べばいいんだ？」

「じりじりて・・・鬼龍でもいし真名で呼んでもここけじ

「うむそつか、ではこれから和人と呼ぼう」

下の名前でか、まあ呼びやすいしいいんじゃね。

それからして、桃香達が起きてきた、桃香はなんだかボケているのが何回か柱に頭をぶつけている。

「ふわ～良く食べた」

「お口あつじよかつた」

「有難うじやこります、何から何まで・・・」

南葉さんが俺たちが泊る所がなかつたとき、家に泊めてもらつた
その南葉さんの娘が山賊達に襲われた所を、俺が助けてやつた。

「こあとはじりますの?」

南葉さんの娘凛が聞いてきた

「このは、南に行つてみたいと思います」

桃香が行く場所を示した。

「やうですか、またこを通つた時はいつでもきてくださいね」

「有難いございます」

あれから少しして、月から南に旅立つので食料などを調達してから出発することになった。

「よし、これだけでいいな」

「ああ、もうだな」

「少し荷物が多くなったのだ～」

俺と愛紗、鈴々で食料の調達に来ていた、桃香と星、離里は別の買い物をしている。

「じゃあ、帰るか」

「やうだな、長くことは時間がないからな

「やうですね」

帰ろうとした時、向こうから声が聞えてきた。

なんだ?

「スマン、先に帰つてくれ

「どうしたのだ?なにがあるのか?」

「いや、ちゅうどとな・・・」

荷物を愛紗達に任せて、声がする方に行つた。

そこには、俺が最初に会つた山賊達が店を荒していた。

「やめてください? なこをするんですか?」

「へへへへ、じゅあ金を出しなそれで許してやる

「ナハだぞ、兄貴の言ひておひつひつ

「は、早くするんだな」

あこひり・・・前の中ひで懲りてなかつたのか

「おこ、何やつてんだ」

「ああ、なんだ・・・つてお前は? この前の?」

「おこ、お前?の前で懲りたんじゅねえのか?」

「ぐ、あんなんでへこたれるかよ」

「今回は許す氣ねえからな・・・」

闇魔刀を一瞬で抜き、小柄な奴を斬つた。

「あああ……？」

「な、ないしやがる？」

「黙れ……」

せりひそのままHアトリックで兄貴の近くに行き、縦、横に切り捨てた。

「ぐあ……？」

「残るのはお前か……」

「ひい？ ゆ、許してくれだな？」

「だめだ、お前らは人を傷つけた」

デブの男を睨みつけ、体中に畏をあふれ出し
「鬼神の“鬼憑”完全なる父性 伊弉諾^{イザナギ}・・・」

そして・・・

「あ、やっと帰ってきたのだ～」

「遅かつたではないかなにをしていたんだ？」

「いや、何でもないただお仕置きをしていただけだ

「…………」

第十幕 旅立ち・・のはすが（後書き）

いつも、今回もよくなってしまいました。
さて、やつと戦いが出てきました
これからも宜しくお願ひします

第十一幕 旅

「では、これで」

「気お付けてくださいね」

「はい」

桃香があこがれを済ませ、村を出ようとした

「あの？」

「ん？ 凜ちゃん何か用かな？」

何だらう？ 僕はそう思いながら振りかえった。

「これ・・・私が大事にしてたお守り、鬼龍さんにあげます」

「いいのか？ 大事にしてたんだらう？」

「いいんです、山賊から私を助けてくれたお礼です」

とても大事にしていたんだらうな、握ったあとが着いている。

「じゃな、元氣でな」

そう言い残すと、俺たちは村を出て南に向かった。

「鈴々はお腹がすいたのだ～」

「もうだな、もう少ししたら飯にしよう」

「そうですね、村を出てから歩きっぱなしですしね」

朱里と鈴々が腹をすかしていた。

「桃香達は大丈夫か？」

一応桃香と愛紗、星、離里にも聞いてみよう。

「私もお腹す～じゃつた～」

「もうだな、すこしあいが腹にしよう」

「うむ、賛成だ」

「もうですね」

全人賛成のようだ、じゃ飯にするか。

「どうでたべるのだ？」

鈴々が聞いてくる

「やうだな・・・お、あの木の陰で休もう」

そして、木の陰で飯を食べていた

「つまーな

「せうですね

「鈴々、よく歯んでから次を食べなよ」

「わかつてゐるのだ〜」

「お、おこしこです

「確かにな

ぱつぱつして食べている

「よし、そろそろ行くか

昼を食べて少しした後、俺が言い張った。

歩き始めて数十分、桃香が話してきた。

「鬼龍さん、すこし寄つて行きたい所があるんですけど・・・」

「ん、寄つて行きたい所? ビビン? あるんだ?」

「「」のまままつすぐ行つた所にあるんですけど……」

「まあ、別にかまわないが、どうして?」

「え、それは……」

何かいいいたくない事でもあるのか? まあいい

「お~い桃香が寄りたい所があるらしいから、そこで宿を探してみ
よ!」

「え、まあ構わんが、なぜ?」 星が聞いてくる

「桃香が寄りたいんだよ」

「桃香様、そこに行きたいのですか?」 愛紗が訪ねてみる。

「コクン」 言葉を言わずにうなずいた、気のせいか少し桃香の様子
が変な気がした

それからして、数十分後、桃香が来たかつた所に来た、最初に見て
思つた事

その一、土地が広く奥には城らしき建物があつた

その一、「少し賑やかだが、なんだか明るくない

「なんですか」」は？」朱里が聞いてきた

「わからない、桃香が来たかつた場所なんだろう」

「向」」うから誰か来るぞ」星が向」」うから来る誰かを見た。

人影が見えると、今までにぎわっていた人たちが静かになった。

「ビビビ、ビうしたんですか？急に静かになっちゃって」

離里が怖くなつて俺の背中に隠れた。

「大丈夫か離里？怖いなら隠れてる」

「フフフフフ、やつときてくれましたね、待ちくたびれましたよ」

「何だこいつ、見かけからして俺より少し年上の男が部下を引き連れやつてきた。

「何者だ？」愛紗が謎の男に問いかけた。

「鈴々、星、桃香を守つとけ」俺が小さな声で一人に言つた。

「つむわかつた」

「了解なのだ～」

「朱里」」うかに」」

「あわわわ、はい」

とりあえず、朱里と離里を街の人預けてきた。

「よしこれでいいだろ、でアンタ誰だ？」

男は部下に耳打ちをしていた、なにをたくらんでる……

第十一幕 旅（後書き）

どうも、今回は・・・特にありません
次回はなんとか、戦いを書こうと思います

では、

「おい貴様? 何をしている?」 愛紗が男に近寄ろうとした時

「なつ? 何をする?」愛紗は男の部下に腕を掴まれた。

「愛紗？ ひなえ・・・・」

「おつと、あなたには一回眠つてもらいますわ」

男が何やら呪文を唱え始めた。

なつ・・・なにを・・・「そのまま俺は前に倒れた

「鬼龍? なにを寝ている? 騷せ? 騷さぬか?」

愛紗が言つてゐるが、ダメだ意識か・・・・・

「淡島さん？起きて下さい？」

「ウルトラ」

「さ、鬼龍さんが私たちを預けた人の家です」

朱里と離里が悲しそうにしながら、言った。

桃香達の姿が見えない、どこに行つた?

「桃香達は、どこにいる?」

「桃香様達は・・・・・」

「ワシが答えよう」

すると奥から一人の爺さんが出てきた。

「お主たちが一緒にいた者たちは、この先にある城に連れて行かれとる」

城?この先にあつたあれか・・・でもなぜ

「あの城に住んでいる彼奴の名は左慈、そして干吉と言つ男が住んでいる
その者たちは突然現れ、村の女たちをほとんどを城に連れてゆきこ
き使つてゐる。

もしさむかうな事をすれば、殺される」

「なんだ、そいつ強いのか」

「つむ、彼奴は呪文やさまざまな術を使って人を思い道理に動かせ
ることができる」

思ひ立つた。……ん？ じゃああの時、桃香を操っていたのか。

「で、桃香達はどうなる？」

「言ひ事を聞かない者は牢獄に入れられる、わしの妻もそこに連れて行かれたんじゃ
そこで、頼む？お主らしかいないんじゃ？妻を、おなじ達を助けて
くれ頼む？」

あいつら……何て事をしゃがる……

やつ思つた俺は腹を体中にあふれ出し、怒りが頂点に達した。

「ああ、いいだらひ助けてやる必ず」

「おお、あいつがたや」

「朱里、離里おまえたちも来るか？ 桃香達を助けて

一人はお互ひの顔をみあって、

「「もうちろん？」」

息のそろつた返事で返してくる。

「じゃあ、早速いくぞ、左慈のいる城に」

そして俺たちは左慈のいる城の前に来た。

「朱里、離里お前たちは城に入った後牢獄を探して皆を助けるんだ途中まで一緒にいて行つてやるけど、後はお前たちの勇気を示す時だ」

「「は、はい？頑張ります？」

よし、じゃあ行くか

そして俺は怒りを解き放つて、

黒と赤が混ざつた雷が空を埋め尽くし、

雷が体に直撃し、

武器、魔剣スパーダを手にして

畏を放ちながら、城の中に進んでいく

「待つとけよ、クソ野郎が

第十一幕 謎の男（後書き）

いや～、疲れました、今回はやっと覚醒状態になりました
次回は城に潜りこんだ鬼龍達は、牢獄を探すべく、城の中を調べる

・星・

「どうだ、ここは……

そこは薄暗い部屋、明かりが少し照っていた。

辺りを見ると、何人かの女性の姿があった、さらに向こうから声が聞こえてきた。

「ふああああ、しかし左慈様も何を考えているのやら」

「そんな事知らねえよ、ここに来て街にいた女共を連れて来て何をするのか、しりたいねえ」

「おい？ ここはどこだ？」

すかさず逃げようとしたが手と足がヒモで結ばれていて動けなかつた。

「何だお前、もう起きたのか、ここがどこだか知りたいのか？」

右にいた男が言つてきた……ここにいるという事看守か……

「ここはだな、左慈様と千吉様つのが納めてんだよ、その一人はいろんな術を使えるんだよスゲエだろ」

じゃあ、あの時の男はこの城の主だったのか……

その前にこゝから抜け出して、愛紗達を見つけないと・・・
(和人・・・お前はどこにいる・・・)

• 鬼龍 •

「おひおひおひ…殺されなかつたら道をあけぬ——？」

なんかいたけど···・・・気のせいが。

「ま、待つて下さい、早すぎますう~」

一 淡島さん、待つて下さ~い

朱里と離里がハア、ハアと息をもらしながら頑張つて付いてい
る。

頑張れ？朱里 離里もニ少した（多分……）

「おっととヒヒ、エヘンから桃香達を探すか？」

「ま、待って下さい、す、少し休ませて……」

「あ、そうです……少し……休ませて……」

なんか疲れてるけど、そんなに早く走ったかな？

「どうあえず、ここからは一手に分かれて探すぞ

」「はい」「

「ふつ～」にもいなか

あれから朱里と離里と別れて色々と部屋を探しているが見つからない。

あと、武器もスパークダから闇魔刀に変わっていた。
覚醒の効果が切れたらしい、まついつか。

「この部屋は向だろう？」

恐る恐るドアを開けた、目に飛び込んだのは

「……」

バタン？？？？ 気のせいだよな？

もう一度ドアを開けた。

「なんじゅ、一回閉めおつて」

「なんであんたがいるんだ」

そこへいたのは、死んだ俺をこの世界に送り込んだ爺さんがいた。

「まったく、言葉づかいの悪い奴じゃな、年よろこま優しくせんか」

「で、なんのよつなんだ?」

「わざわざしたな、お主にいるお嬢達を助けよつことぬよつじやが
なぜたすけるのじゅ?」

「なぜつて……助けるためだから」

「命に変えてもか?」

「え・・まあ」

「つむ、ではお主にこれ授けよつ」

そう言つと爺さんが何やらブツブツ言つているがなんだ?

そして爺さんが「ハッ?」と叫んだ瞬間腕が火に包まれて新たな籠手が腕に

くつづいていた、これは……

「じうじゅ、おどりいたか? その籠手はイフリート、お主も知つておひづ。

さうして、フォースの力を入れておいたかのう、フォースはフォース

でも少し違う
工夫をしておいた

イフリート・・・確かデビルで が使っていた炎の籠手だつ
たな

「このフォースは指定した人物を引きよせたり、吹きとばしたりで
きるんじや

あと普通に手を触れずに物を動かすこともできるんじや、どうじや
凄いじやろ」

「ふうん分かつた」

「じゃあ、またのう

新たにイフリートが手に入つたけど・・・まあ役に立たせてもらひつよ
フォースの力も手に入つた事だし。

「よし、探すか

第十三幕 探索（後書き）

なんと今回は新たにイフリートとフォースを入れちゃいました。
ウヒヨヒヨ、スマセン笑っちゃいました。

第十四幕 お知らせ

え～どいつも、か～まわ～う～です

今回は少し訂正したい所があります

第十三幕で鬼龍が最後の方に

イフリートの籠手とフォースの力が

手に入りましたが、イフリートの籠手が

手に入った事をなしにしていくください？

後から思つたんですけど、「ベオウルフがあるから

べつにイフリートはいらねえじゃん」

と思つました、そして無茶なことにもう一つ

思ついたことが、（もつめんどくせこからイフリートの技

を、ベオウルフで出来るよ～うじよ～う）

と考えました、なのでベオウルフでデビルシリーズの籠手の技

をなんでもだせぬよ! ひしてまか (無茶です)

フォースの力は使えるよ! ひしてまか

では、また

第十五幕 対決～前篇～

・朱里・

（うへん淡島さんになんな事言つちやつたけど
牢獄つてどににあるんだろ？・・・）

「朱里ちゃん、どつちこまがるの？」

「え、えつと・・・」

どつちに曲がるうか、間違えたらいけないし
うへん、考えていると向こうの部屋から
声が聞こえてきた。

『それにしても暇だな』

『まあまあ、この部屋に薄青の髪の美人
がいるんだぞ』

『まじか？ それにしてもなんで捕まえるんだ？』

『さあな、知らねえよ』

薄青の髪・・・もしかして星さん！？
でも・・ドアの前に居る人に気がかれずにするには
どうしよう。

「ねえ、離里ちゃんどうしよう？」

「え、うーん……あー、やうだー、朱里ちゃん貸して」

ひそひそ、なるほどー！

『ん? なんだあのガキ』

『おーーーなんのよつだ、こーこせ立ち入り禁止だぞ』

「え、あ・・その、中にいる人に食事をやせりと詰われまして・・・

」

「や、やうです」

『やうか、なるべく早く済ませるんだぞ』

「は、はー」

離里ちゃんが言つたとつづ、無事にこはいれた。

離里ちゃんが言つたのは、顔を隠して牢獄にいじ飯を畳むる
よつにしようつということだつたけど
こんなに簡単にはいれちゃつた

「早く星さん達を助けないと」

「やうだね」

なにか声が聞こえてきた

『それにしても暇だな、おいでか一人女で遊ぶんだ』

『ちうだな、どこがいいかな……お、ここつどいいだ』

『なんだ！なこきするんだ！離せー。』

『おこおこ、暴れんなよ』

(あの瓶せき壺かくー、ビーハーフ・・・)

考えてこむと淡島さんのかつた葉が浮かんだ

「いいか、誰かを助けたいなら魔氣をだして立ち退く」

「魔氣を持つて……離里ちゃんー、星さんを助けよー。」

「え、でもどうやって助けるの？ー。」

「へん確かにどうやって、ん？あれは……

『へへへへ、少しあたのしませてくれよ』

『離せー、私に触れるなー。』

『氣の強い奴は嫌いじゃなこせ』

「カ~~~~のー。」

『な、なこせやああああー。』

『「うおーおい大丈夫か！誰だ出てこいー。』

近くにあつたたなを倒した衝撃で、ろつそくのひが消えてしまった。
そして星さんの近くに言ってなわをほどいた。

「星さん、大丈夫でしたか？」

「ああ、大丈夫だ。さあここから出よつとその前に・・・」

星さんが木の棒を持つて男の後ろに行つた。

『「ど、どこだー。』

『「ここだ」

『「な、後ろかー。』

『「ガンー！」

そのまま木の棒で頭をたたいた。

「これでよし、中に居る他の人も一緒に逃げるぞー！」

なんとか皆を助けることに成功した。

淡島さん大丈夫かな・・・

そう思いながら私たちは走りだした。

一方鬼龍は・・・

「桃香～！愛紗～！鈴々～！どこだ～！」

俺はその頃城の中を走りまわっていた。

第十五幕 対決～前篇～（後書き）

いつも、完成しましたいつも

第十六幕 対決（後編）

・鬼龍・

「ハアハア、つたく無駄に『テカイなこの城』

その頃俺は城の中をいまだ探していた。

「お、この部屋はなんだ？」

扉に耳を近づけ中の声を聞いた、なにやら声が聞こえてきた。

『左慈、どうするんですか？』この者たちを』

『ふふふふ、あの男がくるまで生け捕りにしておくんでもよ

『このなわをほどいてください…お願いします…』

『鈴々達を離すのだ…』

『離せ…早くなわをほどけ…』

『あなた達にはまだここに居てもいいですか』

あの声…桃香達の声だ！それに左慈つてやつもこののか…よし、このドアを蹴り破ろ！

・・・・3

・・・・2

・・・・・

GOーー

助走をつけてドアに向かつて走り出した。

「ひおおおおおおーー.」

『ん?なんだ声が・・・.』

「せこやあああーー.」

『ぐぬぬーー.』

「な、なんですかー!」

そのままドアの近くにいた兵をドアと一緒に蹴り飛ばした。

「やつと戻つたや、クソ野郎がー!」

「鬼龍わんー!」

「クククク、来ましたか待ちくたびれましたよ」

周囲には、五人ほどの兵が並んでいた。
そして、左慈の近くには桃香達がいた、手首と足をヒモで結ばれて
いて
動けなくなっていた。

「桃香、愛紗、鈴々大丈夫か？」

「はい！」

「ああ、大丈夫だ」

「鈴々も大丈夫なのだ！」

三人とも大丈夫そうだな、さて・・・あいつをどうするかな

「とりあえず、桃香達を返してもいいぜ」

俺は手を前に出してフォースの力で桃香達を引きよせた。

「「「きやあーーー！」」」

「おつと、大丈夫か？」

俺はこっちに引きよせられてきた桃香達を受け止めた。

「は、はい」

「あ、ああ」

「おどろいたのだ」

「な、なんだその技は・・・」

左慈が向こうで驚いていた、まあそうだよな。

「お前たちは星達と一緒にここから逃げろ」

「で、でも」

桃香がこいつを向きながら悲しそうにして言つてきた。

「大丈夫だつて」

「大丈夫なのか・・・あいつかなり手ごわいぞ」

「ああ・・・わかつてゐ、ほら行け！」

そう言い残して桃香達を助けた。

「ああ、ここの前の仮は返してもうつか」

俺はベオウルフを装備し、周りに青い円が出来ていた

（なんだこれ・・・もしかして）

そして俺は魔人になつた。

「これが魔人の姿か、んじゃいくぞ！」

周りにいた兵たちが行く手をふさいだ

『左慈様達に近寄らせるなー』

『じゃまだーーーーーーーー』

そのまま敵兵を薙ぎ払い左慈の居る所まで走った。

「無駄なことを・・・干吉ー！」

「愚かな者よ、食らうがいい！..」

もう一人の方が何やら呪文を唱え、壁を作った。

「フフフ私が作りだした壁はだれにも壊され「ふん！」「なつ！..」

なんか言つたかな？そんな事を気にせずに壁（？）を壊して左慈に拳の一振りを食らわせた。

「ぐつ・・・・！」

浅かつたか、なら次は！

トリックアップを使って干吉の真上に行つた。

「くたばれええーーーーーー！」

「な、そんなこの私がこんなとこりで・・・ぜもあああー..」

そのまま流星脚で干吉の体づを貫いた。

「あとは・・・お前だけだ・・・」

帰り血を浴びながら、俺は左慈にゅっくじ近づく・・・なにも畏れることなく

「ぐ、ぐるな！私を怒らせるどじつなる知つてこるのか！」

「んなもん、しるか！」

その時、魔人からいきなりスパークダに変わった、なんでだろ？
ちよつといいや、これであいつを殺す。

「ならば、私の術を食らうがいい――！」

やつぱり、なにやら赤い球を投げてきた。

シユウウウウ――・・・

「な、なぜだ！これをくらって生きたやつはいなこに――！」

なんか腹のあたりが暖かい、もつ少し温度を下してくれればいいのに。

「もつ終わりか・・・お前は民を苦しめ、虐殺をしてきた
あの世に行ったら、それを後悔するんだな！」

そのまま魔剣スパークダで体を真つ一つに切り裂いた、
声も上げづにそのまま倒れた。

「ふうへ、疲れた」

第十六幕 対決（後編）（後書き）

どうも、お久振りです（自分で）
今回やつと終わりました、長かったです。
次回からはなるべく恋姫のようにしていきたいと
思います、ではまた

第十七幕　まわかの・・・

・鬼龍・

「いや～本当にありがとうございました、
このお礼は忘れません」

「いやいや、そんな・・」

あの後、無事に街の女達は解放されて俺たちは
祝福を受けた。

「この街を良い街にしていきたいと思います」

「はい、頑張ってくださいね」

「桃香様～、鬼龍殿～そろそろいきますぞ～」

星が遠くから声をかけた、星はなぜかあの時いら
おれを鬼龍殿と呼ぶようになつた、理由はしらん。

「ああ！今行く！」

「行かれてしまつのですか・・・」

「そこにはあの爺さんがいた。

「はい、まだまだ助けを求めてる人達が居ますから、それに
ここはもうあなた達で大丈夫ですよ」

桃香が微笑んで言った。

「鬼龍殿、有難う」やれこました起きお付けて

「どうも、じゃ」

（一時間後）

通りかかった街であるものを見つけた。

「なんだあれ？」

「何でしようか？」

「えつと、『私の名は袁紹…』酔氣あるものは反董卓連合に参加し、
共に戦おう!』だそうです」

星が木に書かれてあつた事を語ってくれた、
確か本では反董卓連合と董卓が戦つだったよな。

「どうするのですか？桃香様、参加なさいますか？」

愛紗がそばによつて桃香に聞いた。

「そ、それはもちろん戦いたくないけど……」

俺も桃香の発言に一票。なぜかつて？決まってるじゃないか面倒だから、以上！

「あつちにもありますよ」

朱里が向こうにあるもう一個の方を指差した
皆はもう一個の方に向かった。

「えつと『天の遣い子、自分のことを神の子と言
い
魏の曹操の配下になつたり！』です」

「ん？天の遣い子？なんだそれ」

「えつと確か、鬼龍殿がここに来る前にもう一人別の世界
から来たと言う男が来たのです。そのものの名は北郷 一刀、
まさか魏の配下になるとほ……」

北郷 一刀……じつかで聞いたことがあるな、うへん
・・・思い出せん。

「そいつの特徴は？」

「えつと、確か胸のあたりに『聖』と書いたものがあつた気がしま
す」

離里が答えてくれた、胸に『聖』と書いたもの……

・・・え？まさか・・・

「なあ！そいつの髪型知ってるか！なんでもいい！とにかく知ってる事全て話してくれ！」

俺は離里の肩をもつて揺さぶつた。

「お、おしえますから、あんまり揺りたないでくれといへー

「あ、す、すまんつい・・・」

「いえ、いいんでしゅよ、まだ田がクラクラするですわー

大丈夫じゃねえじゃん！

「オホン、では離里に代わって私が説明します」

愛紗が代わりに話してくれるそつだ

「確か、髪の色は黒、それにかなりの剣術を持つていると
聞いたことが・・・」

「間違いない、思い出したぞー！」

「何がですか？」

「その北郷 一刀つてやつは俺がいた学園の生徒の一人で
俺の友人なんだよ

「　　え、えええええ！？」

「そ、それは本当ですか！？」

「え、ああ・・・そうだけど」

「本当！一、本当なんだな！？」

皆が一斉に聞いてくる、俺は聖徳太子じゃないんだぞ！

「まじまで一回落ちつかれやんと説明するから！」

それから移動して俺は皆に説明した。

第十七幕　まわかの・・・（後書き）

いつも、いや～さむくなつてきました。

今回も長くなりました。

次回は過去編をやりたいと思います。

第十八幕 鬼龍の過去／前編

鬼龍がまだ向こうの世界で生きていた時の話……

「お～い、鬼龍」

「なんだ一刀、用でもあるのか？」

その日俺は一刀と一緒に学園から家に帰る途中だった。

「明日お前暇か？」

「明日ね……まあ暇だけど、何かあんのか？」

「いや明日良ければ剣道してみねえかな」と思ったから

「剣道か……」

俺は別にいいけど面倒だしな……どうするかな……

「お前剣道した事あるだろ？」

「ああ、あこまで何回かやった事があるけど」

「じゃあここじゃねえか」

うへんどうじよづか……まつこづか

「いいぜ、でこいつやるんだ?」

「それはまた明日言つから」

「ん、了解じゃあな

そこで俺と一刀は別れた。そして俺は家に帰った。

「ふう~今日も疲れたな、さてなにをするかな・・・
そういえばまだクリアしていないゲームがあったな

それから一時間・・・

「はあ~やつとできた、肩が凝つたな

ブ――――、ブ――――

おつ携帯がなつてゐ、えつと誰からだ
ん?一刀から、何だ?

「はい、もしもし」

『よお和人』

「なんだ一刀用か?用が無いんだら切るぞ」

『話を聞けよ・・・それより剣道の事だけ』

それから十分間一刀と話をした。

『 と直つ事だから』

「おひへ、分かつたじやあな」

「次の日へ

いつもと変わらない風景、いいことだ。

「よう一刃」

「よう和人、元氣か?」

「昨日電話したばっかだろ・・・」

いつもどいつの学園。

「そういえば和人」

「ん?なんだ」

「剣道の事だけ今日でもいいか?」

「ああいいけどなんで急に?」

「早くやつた方がいいじゃん」

「分かつた、今日の放課後でいいな」

「おお！」

「放課後」

「なんだあいつ、書類とかなが来ないじゃねえか」

先に俺はきたけどあいつじで油売つてんだ。

そう思つていると向こうから一刃の姿が見えた。

『お～い和人遅くなつてすま痛つてえええええ…何すんだよ…?』

「なにのんきでんだよ、ああん?」

「すまんつてちよつと用事があつてな、そんないじみ始めよ!」

「はいはい」

そしてそのあと、少しだから帰らひとじしてこた。

「お前強いな」

「お前の攻撃が一直線すぎるんだよ」

「なに～、お前だつてワンパターんじゃねえか!…!」

「お前のせつがよつぽじー下手じゃねえか!…!」

「なんだと！」

「やんのかー！」

「「・・・・・」

「「フフ、アハハハハ！」

その笑い声が剣道の部屋一面に響いた。

「じゃあな」

「ああ、また明日」

その言葉が俺と一刀の最後の言葉だった・・・

第十八幕 鬼龍の過去（前編）（後書き）

こんばんわ、今日は過去編ということで鬼龍の過去を書いていきます
設定では一刀と親友とかは書いていませんが、楽しんでください

第十九幕 鬼龍の過去(後編)

そして次の日・・・

その日俺は珍しく寝坊をしてしまった。

「やべー！間に合つか？！」

学園まであと数キロ、ここには近道を使つか。

「ほつ、ほつ、ほつとよしこのまま行けば
なんとか学園に着いたものの、さすがに家から学園まで走ってきた
から

さすがに疲れたな、どこか座る場所は・・・あそこがあいてるな。

「よつこい・・・『おい！何してんだ！』この声・・・一刀か」

俺は一刀の声がする方に走っていた、でもさすがにさつき走つてき
たばつかだから
足がへとへとだ。

「ん？ここはたしか歴史資料館だつたな『くつ・・・・離せ！』『

誰が離すか！』

おい！一刀じうじうわああああ！』な、なんだ！？

そのとき大きな光が突然出て、一刀ともう一人の男はそこに居なかつた。

「あれ？ 一刀？ おいどこだ？」

よんでも返事がなかつた。

「おい嘘だろ・・・一刀！ どこだ！」

ガツン！

ん？ なんか今蹴つた気がしたが・・・

「何だこれ？ 鏡・・・？」

そこには割れていた古い鏡が落ちていた。

「まさかこれに吸いこまれたんじゃ・・・なわけないよな」

そのまま俺は教室に戻つた。

「あれ？ 一刀がいない、なんでだ」

俺と一刀は同じクラスだが、そこには一刀の姿が無かつた
おまけに一刀の机もない・・・

（なんだ、どうなつてんだ？！）

「なあ、このクラスに北郷 一刀ってやついたわ」

『北郷 一刀？だれだそいつ』

え・・・なんで覚えてないんだ・・・

そして放課後・・

(まさか、そんな・・・)

俺は急いで一刀の家に向かおうとしていた、だが行く途中一台の暴走車にはねられて

俺はこの世を去った・・・、そして神が俺にもう一度やり直すか、ここに居るか

と言わされたので、もう一度やり直す方をえらんだ・・

「どうわけわ

「　　・・・・・」

皆は俺の話を黙つて聞いていた。

「どういふんだ桃香」

「え? なにがですか?」

「いや、その連合軍に参加するのかしないのか

「えっと・・それは・・」

「桃香様、我々義姉妹はどうまでも付いてゆきまわ」

「鈴々もついて行くのだ〜!」

愛紗と鈴々は桃香について行くと言つた。

「私たちもついてゆきまわぞ」

星、朱里、離里も桃香について行くと決めた

「皆・・・ありがと〜・・」

「で、どうするんだ」

「決めました、私は民を、人々を救うため連合軍に参加します!」

そして俺たちは反董卓連合軍に入ることにした。

(一刀もそこにあるんだろうか・・・)

第一十幕 反董卓連合軍

・桃香・

（あんな事言つちゃたけど・・大丈夫かな・・）

私たちはあの後、街を出て反董卓連合軍の軍議が行われる場所に向かつっていた。

「ん、どうした桃香？不安そうな顔して」

「え、あ、いやなんでもないです・・・

言えない。今更不安になつたなんて・・・

「桃香様、少し休みましょ」

「え、あつさん、そつだねもう暗いしね」

愛紗ひやんが寝心地の良い所を探してくれた

「鬼龍殿、いつ女の姿になつたのですか？」

「え？ああたつを向ひの草むらで女になつたけど」

「桃香様、どうかしましたか？」

「ううん、何でもないよ」

「鈴々は牛なんかになつたりしないで」

「鈴々は牛なんかになつたりしなこのだ」

「朱里ちゃんの『うとう』ですか？」

そんな事を話していくとすっかり辺りは暗くなつていた

「…………」

「…………」

「皆寝ちゃいましたね」

「ああ、わうだな」

私と鬼龍さん以外は皆寝ててゐる。

でも、まだ・・不安が詰まつてゐる・・

「どうした?不安な事でもあるのか?」

「えー?そんなことないよー。」

「いたくとも、言えない・・

「・・・戦いの」とか・・・?

「えー」

「隠すことはないさ、誰でも戦いは好きでやつてるんじゃないそつだろ?」

確かに鬼龍さんの言う通りだ、私も好きでやつてるんじゃない人々を・・顎を守りたいために・・

「鬼龍さんは怖くないんですか?」

「ん?俺か?当然怖いさ、戦いなんてしたことないからな

「そりなんですか?鬼龍さんのいた所ではなかつたんですか?」

「うーん、俺がいたころはなかつたけど、産まれる前の時代は戦いがあつた」

鬼龍さんのいた時代が羨ましくなつてきた・・・

「だが今からする戦い多くの死者が出てくる、けどそれを無くすのが

お前の田指してくる平和だろ?」

「それじゃあどうして鬼龍さんは、私たちに力を貸してくれるんですか?ー」

「どうしてって・・そりゃあこのまま見殺しにするわけないだろ」

「どうして戦うですか？！」

「・・・申し訳ないが俺には平和がどう言つ事か分からぬ、だから平和を感じた事もない」

「え？ じゃあ・・・なぜ」

「話はここまでだ・・早く寝ろ」

「桃香、そろそろ着くが、覚悟はいいか？」

「は、はい！」

「大丈夫ですよ、私たちがいますから」

その後私たちは朝早く出発してよつやく軍議のある場所に着いた。

・鬼龍・

俺は・・一刀にどう言えばいいんだろうか。

「まあ、あつてから話すか」

「バサ・・こんなに人がいるのか・・

そこには十数人の将がいた。

「あなたはどなたですか？」

一人の女武将が俺たちに聞いてきた。

「私たちは連合軍の参加見てきたんですけど・・・」

「そうなのでですか！自己紹介がまだでしたわね

私の名は袁紹、字は本初ですわ以後お見知りおきお

「はじめまして、私の名は劉備、字は玄徳と言います
こつちは私の義姉妹の关羽と張飛と言います」

『あの者たちが黄巾の乱で活躍した・・・』

なんだ桃香達活躍したのか？

「あら、劉備さんじゃない」

「ああ！曹操さん！ げんきでしたか？！」

声をかけてきたのは背が低く、髪が青い女が居た。

あいつが曹操か・・・その後ろには一人の背が高い女ともう一人は
男がいた。

・・・ん？男？

「曹操さん、後ろの三人は？」

「ああ、私の従姉妹よ、右から夏侯淵、夏侯惇、そして一刀よ」

「その通り、俺が”天の遣い”と言われている北郷一刀だ」

「そつちの人達は？」

「あ、えっと右から、趙雲さん、鳳統ちゃん、諸葛亮ちゃんそして鬼龍さんです」

「ん？鬼龍？」

「どうしたの一刀？」

「いや、おいそこの鬼龍とか言つ奴」

「ん？誰かが俺の名前をよんだか？」

周りを見渡すと一人の男が指差していた。

「なんだ？」

「お前名前は？」

「鬼龍和人だが、それがどうした？」

「いや、何でもない」

向こうにせきすいているのか、気がいてないのか。
ま俺は気がしているんだけどな。

「おまん、話を戻してよろしくへっ。」

「え、はー」

「ええ」

そのあと、袁紹の説明を聞き、解散となつた。

第一十幕 反董卓連合軍（後書き）

今回、長く書きましたがどうでしたか？
これからもおもしろく、楽しくしていきまます。
ではまた

第一十一幕 再会（前書き）

今思つたら孫堅が出てない気がした・・・

原作では出てたっけ？誰か分かる人がいたら
感想に書いてくださいお願ひします。

第一十一幕 再会

・鬼龍・

軍議の後、俺たちは一つの部屋を借りて、戦いに備えての話合いをしていた。

「…………と言つて、何か質問がありますか？」

愛紗が董卓軍の戦況を説明した。

「では、これで説明を終わります」

説明を終えた後、俺は少し外に出て散歩をしていた。

「鬼龍殿」

「お、星かなんだ？」

「少し私の手合わせを願いたいのですが……よろしいですか？」

「ああ、いいぜ」

「では、ござれ！」

星が槍を構えて俺に向かつて突き出した。

「そんなんじゃ当たらないぞ、もつと相手の動きを読みあらかじめ

備える

一瞬星の動きが止まったのを見て、闇魔刀を素早く構えアッパースラッシュで星の槍を空中に飛ばした。

「なつ・・・・!?

「はい、終了!」

「まだまだ敵いませんな、まだ強くなれば・・・」

「俺が教えてやろうか?」

「いいのですか?」

「ああ、まず槍を構えて突いてみる」

「分かりました」

そう言いつと星の槍は素早く前に突き出した。
流石だ、でももつと早くなるな・・・

「星、槍貸してみ」

「ん?はい」

「星は槍が出るのは早いが、もつ少し工夫したらいつと早く出来るぞ」

「どうのうす元すればここのですか？」

「槍を出すのと同時に足を前に突き出してみる、こんなふう・・・」

「一・」

ヒヨン---

ヒヨン---

「お、おおー凄いですな」

「いやでやつてみる、上手くなるから」

「あつがとつゝ」

『あの～・・・すこません』

一人の兵が俺に話しかけてきた。

「ん? 何か用か?」

『自分たちにも教えてくれませんか?』

「へへ、じつじよつか・・

『俺が教えてやるわ』

俺が考へていると横から声がした。

「おへ、頼むわ」

「まかしとけりやい！本当に頼むのかよ。」

「だつてお前が教えてやるつて言つたんだから、しつかりやれよ」

「おい！『冗談だつてのー』『お願いします！一刀ジのー』『まじかよー』

少しは俺も楽をしたいからな。

『おーいどーだー』

誰だよ、ゆつくつ寝て『の俺の邪魔をして』いる奴は・・・

「おわー！」となると『面たのか』

「なんだ、一刀殿」

「お前、鬼龍和人だろ？」

「それがどうした」

やつと『氣づいたかな・・・

「俺だよー！北郷 一刀だよー！」

「アナタダレデスカ、ワタシアナタシラナイ・・・」

「お前ふざけてんのか……、そんなことよつなんで！」元祖のん

だ？」

「ああ、お前が突然いなくなつたる？」

「ああ

「そのあとお前の家に行こうとしたときに、車にひかれて死んで、

ここに

来たんだよ」

「やつだつたのか……そして何で服装してるんだ」

「ん？ ああこれは、あの世に行つた時、神がなんでも願いをかなえてやるつて言つたから」

「まあそれはいいとして……俺の仲間にならぬいか

「…………は？」

「お前と俺だつたら、ハーレムも出来るぞー。」

「…………ハーレム…………」

「どうだ？ 魏に入らないか？」

「こつ……こつに来てなんか変わつたな……

「断る……」

「なつ・・・-ビーフ・・・」

「おまえ・・・」ひばりが来て変わったな

そつぱに残すと俺は、帰つて行つた。

(ま、いざれ・・・)

第一十一幕　再会（後書き）

「一刀と親友だつたんかい！」と思う人がいると思いますが
まあ、優しく見守つていてください

第一十一幕 悶み

・華琳・

「あの和人とか言う人・・・何者かしら・・・」

「一刀殿は何やら知つてそうでしたが・・・」

（それにしても・・・キレイだったわ・・・）

「今度一刀殿に聞いてみましょつか？」

「いや、私から聞いてみるわ」

「分かりました」

それと・・・気になる事もあるしね・・・フフフフ・・・

・鬼龍・

ゾクッ！

「なんだ今のは寒気・・・」

それにして・・・広すぎて迷いそうだ・・・

・・・迷っちゃった。

「ん？」「ませ……」

俺の田の前に一つのテントがあった。

「入ってみるか……（バサツ）」

おお～、ひるいな～、辺りを見渡すと壁に”県”と書いた旗を見つけた。

（県？まてよ……ヤバイ！」「ませ……）

『誰だ！？そこには誰の旗か！？』

しまった！？どうする！？

- 1、逃げる
- 2、謝る
- 3、事情を話す

どうする俺！？

『ん？お前は……』

絶対絶明のピンチ！

『お前が鬼龍か？』

「え・・・どうして俺の名前を」

『軍議の中に居たる・・私たちは』

その中にはピンクの髪を一つに束ねている女がいた。

「もしかして、孫堅？」

『貴様！孫堅様に向かつてその口はなんだ！』

『やめろ、祭構わない』

『しかし・・・？！分かりました・・・』

なにやら凄かつたな・・

「その通り、私が孫堅だ、字は文台お前は……」

俺は鬼龍、字は和人、刀とは昔からの友人だ。

なに！ まさか本当とは……

「私は黄蓋、字は公覆だ、それにしてもお前女か？」

なにやら、物騒になりそうだな。」

「 もしかしたら… 」 (タシ)

あ、こら！待てー！

「ハア、ハア、さすがにここまでくればいいだろ」

そうしていると辺りが暗くなってきた。
そろそろ戻るかな・・

「ただい・・・何してんだ・・・」

そこには、星以外は・・これは遊びか？

一何せこてんだ・・星

「おお鬼龍殿見てのとおりですぞ」

「いやこれは遊びじゃないだろ、どう見ても」

なにをしているのかと言ふと
あわただしくと

見ての通り異なっています

いや、異母わせて同じ風を見つけるんだろ」

「うひの鎧ターネ・セイゼ・・・」

「あやあ！ 鈴々ちゃん！ 胸は触っちゃ嫌ですよ～」

「愛紗姉ちゃんと桃香姉ちゃんは胸が大きくて羨ましいのだ・・・」

「す、凄いですか・・・」

「やつぱつ、一人共す”こ”です」

はあ、何してんだか。あれ？星？

「フフフ私も混ぜてもうおおかな

「ひひー星まで・せめひー・

お前まで何やつてんだ――――――

「何やつてんだ――――お前ひー――

「ま、まさか鬼龍殿がいるとこ・・・――

「恥ずかしいよ～――――

「まあいいから、明日から戦いがあるからな。早く寝るんだぞ」

うへん、寝付けない。

「ンン・・・

「あの、鬼龍さん・・・ちゅうとこですか？」

朱里か・・・「ああ、いいぞ」

「失礼します・・・」

朱里の後ろには離里が着いて来ていた。

「どうした、寝れないのか?」

「あ、あの一緒に寝てもいいですか・・・」

「え、まあ構わんが・・・」

そのまま朱里と離里は俺を真ん中にして両脇に入り込んだ。

「・・・」「・・・」「・・・」

気まずい、何をすれば・・・

「あの・・・少しいいですか?」

離里が訪ねてきた。「何だ?」

「鬼龍さんは、その・・・怖くないんですか?」

「?何がだ?」

「いえ、なんでも・・・」

「そう言えば、朱里と離里は戦いにでるのか?」

「私たちは、その・・・」

「まあいい、出ぬか出ないかは聞かないよ」

それにもしても一人共まだ幼い感じがするな・・・
日中なんの本を読んでんだ?

「なあ

「はい？」

「朱里と離里は口中何の本をよんだんだ?」

「／＼＼＼＼えつと・・・その・・・／＼＼＼＼」

なにか秘密にしたいのだろうか。まあいいけど。

「でも、もう一つあるぞ」

「 」 」 」 」

俺はこのまま、ここで生涯をすこすんだろつか・・・

第一十一幕 憶み（後書き）

「ここにちは。もう2011年も終わりそうですね。
これからも寒くなつてくるでしょう（たぶん・・・）
これからも恋姫無双～龍の如く～をよろしく
では

第一二三幕 兵糧庫奪還

・鬼龍・

「いいですね、では」れより董卓軍討伐をはじめます！皆さん頼みましたよー！」

「「「御意ーーー」」」

「私たちは」れから孫堅さんと一緒に、董卓軍の拠点を攻撃します」

桃香がそつぬけると馬に乗った女が一人大軍を率いて、いつひこやかに現つてきた。

「劉備、行くわよ」

「はーーーじゃあ皆ー平和のためにーーー」

『いつねおおーーーー』

そのまま俺たちは孫堅とともに、董卓のいる拠点に向かつた。

「はあーーー・・・・

「どうしたのですか鬼龍殿？」

星は隣によつて言つた。

「いや、戦いが面倒になつてきたから……ただそれだけ」

「なにを言つているのですか、鬼龍殿は男（？）なのですから戦場に出て、活躍しないと」

男が活躍する所か？」
「

「分かつたつて、それに俺は……」

「俺は？」

あれ、何言いたいんだつたつけ？

そうしていると拠点の近くまで来ていた。

『孫堅殿』

「ん？ どうした」

一人の兵が孫堅に耳うちをした。なんだううへ

「なんだと！ ほんどうか！ ？」

『はい、それと向かつている拠点には鬼神呂布がいると……』

「へへ……袁術め……」

「どうしてんですか？」

「ああ、さつまいに来る途中、袁術に補給を頼んでいたのだが補給を回さないと先ほど連絡してきた」

「えー、それじゃあ食料とかはどうするのですかー!？」

「私にもわからん!」

補給が来ないと言う事は、食料も来ないってことか。それじゃあ長期戦だつたらこっちが不利じやないか! 何か手は・・・

「あの孫堅殿」

「なんだ」

愛紗が孫堅になにか聞いた。

「Iの近くには敵の兵糧庫はないのですか?」

「兵糧庫? 食べ物を保管している所か・・・

「確かにこから南西に一キロの場所にあるが」

「私が兵糧庫を奪つてしまつ」

「なにー! それは本当か!」

「愛紗ちゃん危ないよー!」

「大丈夫です桃香様」

愛紗が兵糧庫を奪うと言っているが、大丈夫なのか？

「それでは何人か部下を・・・」

「いや私一人で十分です」

「な・・・つ・何を言つてゐる！一人で行くなど、命を捨てるのと同じことだぞ！」

ふあ～～寝む・・・するとチョンチョンと誰かが俺の裾を引っ張つた。

「なんだ星？」

星が裾を引っ張つていた。何だ？

「鬼龍殿が行けばよいのでは？」

「なんで俺が・・・」

「鬼龍殿は私たちよりも遙に強いのですから」

「ただそれを理由に・・・」

「はあ、分かつたよ」

俺は孫堅に近寄り

「俺が愛紗と一緒に兵糧庫を奪つてくる」

「えー良いのですか鬼龍殿?」

「ああ、手伝つてやるよ」

その言葉を言い残すと俺と愛紗は馬にまたがり、兵糧庫を目標した。

「それでは兵糧庫のことは鬼龍達に任せて、私たちも急げわよ」

そのまま俺と愛紗を残してほかの人達は拠点に目標して向かった。

(死ぬなよ・・)

そしてようやく俺と愛紗は兵糧庫の前に来た。

「覚悟はいいですね?」

「いつでもいいぜ」

俺は闇魔刀を抜き構えた。

「いぐぞ愛紗!」

「はい!」

『敵集――敵集――』

中に入った途端、敵の兵が鐘を鳴らした。

「愛紗！構わず斬れ！」

『一人だけで何ができるって言つんだあ？』

たしかに無謀だが……俺に会つたお前らは運が悪いな！

（殺す……斬る……）

？なんだ、今のは……

「鬼龍殿！」

ハツ！前を見ると兵が俺に向かつて剣を振つてきた。

「残念……」

俺は素手で相手の攻撃をはじいた。そうパージルの力を持っている俺は

パージル同様、素手で攻撃を防ぐ。

「フンッ！」

そのまま空中に浮かんだ十人の兵をまとめて、空中連斬で斬り裂いた。

『さあ……』

声もあげれずにそのまま体が一つに分かれた。

「さあ来い！」

「鬼龍殿……」

『ぎやああああ！』

そのまま敵を斬つているといつの間にやら体の周りに赤黒いオーラ
が出ていた。

「もう終わりか……あつけない」

ヒュン！グサ！

「矢……そこか……」

『ひいいい！来るな——悪魔！』

「鬼龍殿！もうよい！」

「何言つている愛紗、一人残らず殺す……」

『許してくれ——ぎやああああ！』

ククククク楽しい……人を殺すのが……

「き、鬼龍……殿……？」

「ククククク……ハハハハハハ！」

そのまま俺は兵糧を壊そつとした。その途端後ろから愛紗が抱きついてきた。

「鬼龍殿……もう良い……良いのだ……」

愛紗が泣きながら俺を力強く抱きしめた。

「愛……紗……」

「さつきはすまなかつた」

「／＼／＼／＼い、いえそれより大丈夫ですか？／＼／＼／＼

愛紗が照れながら言つた。

「ああ、大丈夫だそれより早く桃香のところに行こう」

「はいー。」

さつきの声は何だたんだ……

第一十四幕 呂布

・桃香・

(愛紗ちゃんたち、大丈夫かな・・・)

「劉備、付いたぞ」

そうして「る」と敵の拠点の前についていた。

「(ル)にはあの鬼神呂布がいる。用心しろ!」

『はつ』

孫堅さんが言つてはこの拠点には鬼神呂布がいるところ。

「桃香殿、大丈夫ですか?」

「うん大丈夫だよ」

「これより敵の拠点叩く! あの拠点には呂布がいるので、注意しつつ進め!」

『はつ』

「行くぞーーー!」

『અનુષ્ઠાન』

「私たちも頑張ろう！」

そして敵にめがけて突撃した。

向こうからも敵の大軍がきて、湧しくふたかたた

——しけ——ひるむな——！」

私たちも遅れをとるな!!

八十九

その時一人の『武将た』てきた

別巻で各力以

『報告！呂布が現れました！』

一人の兵のほうへ聞いて私は嘆息した。

誰か止められぬ者はおりぬのか!?」

私が行きます

「星ちゃん？！ダメだよ！」

「鬼龍殿と愛紗が活躍しているのに、わたしだけ助かるのは気分が悪いのです」

「でも・・・」

わたしはなんとか説得しようとしたが、なかなか聞いてくれずついには鈴々ちゃんまでも言いだしました。

「じゃあ一つ約束ね、必ず生きて帰ってきてね」あいつが・・・

・鬼龍・

俺と愛紗は兵糧庫を奪つた後、急いで桃香達のいる場所まで戻つていた。

「桃香様は大丈夫でしょうか・・・」

「桃香達なら大丈夫だろ星と鈴々が着いているからな

「そうですね」

そうするとひとつの兵が二つに分れていた。
良く見ると負傷している。

「どうしたー何があつた!」

『りょ・・畠布が・・』

呂布・・・鬼神と言われてゐるあいつか。

「とにかく、傷を治さないと」

愛紗がいそいで馬に乗せようとすると、何かないかなとさがすとビンがあつた。

（これは、確か何でも治せる薬）

「おーー！これを飲め」

『何ですかそれは・・・』

『いいから飲め』

兵に飲ませると傷が見る見るひびに治つた。

『おお、傷が

『愛紗お前は兵を本陣に連れて行け俺は呂布の所に行つてみる』

そつ言い残すと俺は馬にまたがり呂布のいるところに向かつた

そこで俺が見たのは、一人の女が槍を振るつて、見方を難しき扱つていた。

「呂布・・・」

第一十四幕 叫布（後書き）

作：「んばんわ、もうすぐ年が明けてしまします。

さて、今回は報告があります。恋姫無双は一回連載を止めようと思
います

理由はあまりないですが・・

鬼：なんでやめるんだよ！このまま続けれよ！

作：他の小説を書いていたら、書いている小説が早く
終わりそうだったから・・

鬼：じゃあ宣言しろ

作：何を？

鬼：遅れてでもいいから、必ず復活して続きを書くこと
お！

作：・・・分かつた宣言しよつ。盐さん！またどこかで会つかもし
れません

しかし！必ず他の小説を書き終わったら！必ず復活します！
大変勝手ですが、どうかお分かりいただけたら辛いです。

では、また！どこかで会いましょう。

（ちなみに書いている他の小説は、バカと奇跡の召喚獣です
興味があるひとは読んでください！お願いします！）
よければ・・またどこかで会いましょう・・

第一十五幕 復活

作：ビームも、ここにちはま。

そして復活しました！

鬼・早いな！

作・いやーあの後少し熱が出てね、暇だったから小説をどうしようか迷ったんだよ。

鬼・どうしようかとは？

作・今一つ書いてるんだけビ、一つを一緒に書くか、一つだけにしようか
悩んだんだよ、そして出た答えが、二つ一緒に書こうとしたことにして
たんじや

鬼・いいじゃねえかそれで。まあ一つもかくと疲れるけどな。

作・はは、何を言っているんだ君は俺が君みたいにちゃんとちんたら
らじてる

・・・わけないよね！その刀をしまって、俺を殺す気か！

鬼・大丈夫だ・・・存分に傷みつけてやるから・・・

作・その笑顔は冗談には見えないけど！？

鬼・でもかけるんだからいいじゃねえか、それで。

作・そうだな、じゃあ頑張るか、年が明けるのも近いし。

鬼・そうだな終わるまで付き合つてやるよ。クズ

作・おお、頼んだぞ。アホ

鬼・ああ！？何だと！

作・おお！やるつてのか！

鬼＆作・こいつ！殺す！

作・では今後とも恋姫無双～龍の如く～をよろしくお願ひします。

鬼・う・・・・つ（死亡）

第一十五幕　復活（後書き）

みなさんどうでしたか、「早！」と迷つ方もいるかもしれません。今後ともよろしくお願いします。

第一一十六幕 鬼神VS鬼龍

「あれが・・呂布・・」

そこには槍をもつたひとりの女が味方を薙ぎ払っていた。
その姿はまさに鬼神と言えるべきだった・・

「いやあ・・どうしようか・・」

すると一人の女が呂布に向かつた。

その一人はどこか見覚えがある姿だった。

「呂布！覚悟！」

一人の女が呂布に向かつて突っ込んだ。

（何やつてんだあいつ！死ぬ気か！？）

そう思つているともう一人突っ込んでいった。

「鈴々が相手なのだ――！」

（鈴々！？なんであいつが、それにもう一人は星じゃねえか！）

俺は急いで向かつた。

「はあ、はあ何て奴だ・・・」

「鈴々もつかれたのだ・・・」

「これで・・・終わり・・・（ヒュンー）」

「く・・・・つ！」

ギン！

「ふう～、ギリギリだつたな」

俺は間一髪のところで呂布の攻撃を閻魔刀で防いだ。

「「鬼龍殿！」」

「よつ大丈夫だつたか？」

「なんとか・・・」

「大丈夫なのだ～」

そのまま俺は呂布だと後ろに飛ばした。

「誰・・・？」

「俺は鬼龍お前鬼神の呂布だな」

「どうして名前を・・・？」

「そんなことはどうでもいいさ、勝負しろ一騎打ちだ」

「わたしも戦いま・・ぐつ！」

星も戦うとしたが傷を負っていた。

「お前は一度戻つて傷を治してもらひえ」

「しかし・・・・」

「いいから

「分かりました・・・」

「それから向こうに行つたら愛紗に薬をもらひえ」

「分かりました」

星と鈴々は一旦戻つて行つた。

「これで邪魔するものはいなくなつた」

俺は闇魔刀を腰に当てて構えた。

「行くぞー！」

「・・・・（スツ）」

俺は呂布に向かつて走り出した。呂布も俺めがけて走りだした。

「フンー！」

俺は闇魔刀を神速の早さで抜き出し、呂布に向かつて斬りつけた。

「・・・・！」

呂布は何とか俺の攻撃を防いだ。

「やるな、流石鬼神」

「そつちこや・・・」

「そりゃどうも」

俺と呂布は後ろに下がった。

「魔人化・・・」

そして俺はパージルと同じ魔人になった。

「いいのを見せてやるう・・幻影剣！」

そして俺は幻影剣を自分の周りに設置した。

「幻影剣・・?」

「そうだ、そしてこの姿が魔人、悪魔だ・・・」

「悪魔・・」

「そしてお前は今日ここで終わる・・」

俺は呂布の周りに幻影剣を設置した。

「・・・・・」

「心配するな、終わると言つても死ぬわけじゃない」

ふうへ、と息を吐いて・・

「・・・刺せ・・・」

その言葉と同時に幻影剣は畠布の足、腕に刺さった。

「がつ・・・・・」

第一十六幕　鬼神VS鬼龍（後書き）

どうも、前の幕で伝えた通り復活しました。
今は別の小説も書いてるので、興味があつたら読んでください。
では

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5641y/>

恋姫無双～龍の如く～

2011年12月27日19時54分発行